

# 郷土文化財紹介

## 石造物シリーズ

### ＜青面金剛像と庚申信仰＞

庚申(こうしん)信仰に関わることは、「庚申講(こうしんこう)」という相互扶助の講の話として耳にすることはあっても、その内容については分からなくなり手がかりとなる石造物も風化が進んでいます。

そこで、坂下町文化を守る会編「坂下町の石仏(町組・合郷・下組・上野)」を見ると、庚申信仰に関わる石造物は青面金剛像(しょうめんこんごうぞう)3体(小野沢、中之垣外古庵、高部観音堂)、庚申塔6体(新町八千代、相沢半憎坊、高部観音堂、握観音堂、時鐘大野屋墓地)となっています。



↑上野小野沢地内にある青面金剛石像  
六臂の青面金剛像、下部両脇に鶏、その下に猿が確認できる。  
享保十一丙午年七月吉日(1726年7月)  
台座に8名の施主名山内藤蔵、彦右衛門、安右衛門、文右工門、以下不明が  
きざまれる。

坂下町史編纂委員会編「坂下町史(平成16年版)」と「坂下の屋号地名考」、「ふるさと坂下」(鎌田宮雄著)によれば、初の庚申尊像は寛永年間(1633年前後)に赤田の地に勧請され、田の神、集落の守神とされたのではないかと推測できます。延宝8年(1680年)の庚申年には、今は大野屋の墓地内にある「奉供養庚申」の石碑を建立したと考えられます。その後、赤田榎の木(とちのき)庄屋の時代享保17年(1732年)に庚申尊の100年祭が行われた

とあります。さらに100年後天保3年(1832年)、榎の木庄屋から分かれて川上川を渡り出た元庄屋(もとじょうや)の時代に200年祭を行いました。明治になって庚申尊は各地を移動しますが、昭和6年(1931年)三井寺の南下にお堂を建て安置されました。稲荷山の庚申様です。この年300年祭が営まれ、この記念として新町八千代敷地内に「庚申尊」の石碑が建てられます。裏にその由緒が彫られているとあるが、現在八千代跡では記念の「庚申尊」石碑は見当たらない。なお、八千代へは元庄屋から婿に入られた方が居り、赤田の庚申尊との繋がりがあるようです。

このように合郷で始まった庚申信仰は、1700年代(江戸中期)に高部、中之垣外古庵、小野沢、握へと拡がり庚申塔などが次々と建立されてゆくようです。



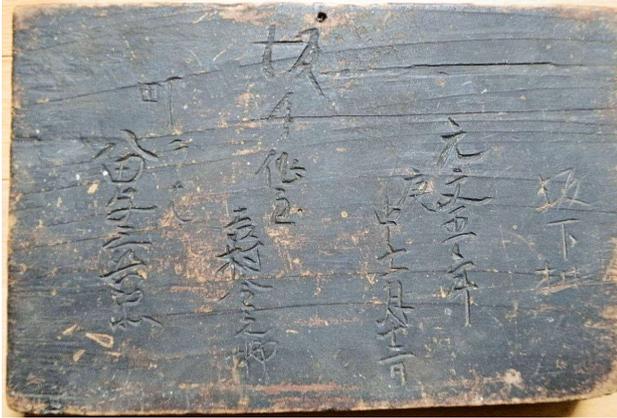
↑坂下で一番古い庚申塔  
時鐘大野屋墓地内  
「延宝八申歳九月吉日  
(1680年 庚申年)  
奉供養庚申塔  
一右工門他」の銘有り  
高さ170cm、幅40cm  
と坂下一番の大きさ

庚申信仰は、一説に中国から伝えられた道教の「守庚申(しゅごうしん)」に由来するタブーに基づく習俗といわれます。人の頭部、腹部、脚部には3匹の虫、三尸虫(さんしちゅう)が居て庚申(かのえさる)の日に眠ると天にのぼってその人の過失を天帝(人の寿命をつかさどる神)に告げ寿命を縮めるといわれ、庚申の日は徹夜をして三尸虫の上昇を防がねばならないとされた。これを「守庚申」というそうです。

2019年の夏、高部のYさんから1枚の古い版木らしきものを示され、これは「どう言う性質のものか」と尋ねられました。



↑版木表の図柄  
馬をひく猿 鳥(鶏?)  
馬の腹に「オモダカ」



↑版木裏の文書  
元文五年庚申十一月十二日  
(1740年、庚申年)  
板イ作主 吉村金之助  
町ニハ 八田与三兵衛 (相沢万場の主)

郷土文化財保存会例会で会員と検討した結果、庚申講で60年に1回の庚申年(こうしんねん)を記念して作成されたものであろうとなりました。そのことを伝えるにYさん宅を訪ねる途中で高部公会堂前に立てられた庚申講の幟旗に気付きました。幟旗ことを尋ねると、今も庚申講の集まりが続けられており青面金剛の掛け軸もあることを話され、さっそく拝見できることになりました。また、講の様子を少しうかがうことも出来ました。

↓高部観音堂脇の庚申塔  
「明和八辛卯三月吉日  
(1771年3月)  
裏施主名  
「嘉重良 利右衛門 只助  
彦左衛門 惣兵衛 助十良」



講の集まりは、年6回の庚申日(こうしんび、暦のかのえさるの日)に講員の家を持ち回りで行われていたようですが、今は2ヶ月に1回として年6回公会堂に集まり親睦会として続けておられるそうです。

ところで、辞典などの解説によると庚申信仰の始まりは古く平安時代には貴族等の中で流行したとあります。貴族の中では死を恐れ阿弥陀信仰が流行していたころですので、三尸虫に告げ口され寿命が縮まっては大変だったのでしょうか。ですが、かなり遊興的な内容で、歌会、音曲、酒宴などで夜を明かしたようです。鎌倉、室町時代には武士階級の中へと広がりを見せますが、その頃には仏教、神道、修験道などの要素が入り交じり複雑な内容のものになるようです。庶民の中へも広がり、江戸時代には日本全国津々浦々に庚申塔が立てられていくことになります。

坂下地区の庚申塔も江戸時代中頃からのものがほとんどです。最も古いのは大野屋墓地内の「奉供養庚申」で〈延宝八(1680)申歳9月吉日 一右エ門他〉の銘があります。前述「版木」の60年前の庚申年に建立された庚申塔です。

拝見した庚申講の掛け軸は再装丁されていますが、江戸時代から続く講の中心となってきた掛け軸のようです。大変立派なものです。

上から「日月」「青面金剛」「二童子」「四夜叉」「雌雄鶏」「三猿」が描かれています。辞典などでは「月」は〈月待、二十三日、月の出を待ち



↑庚申講の掛け軸

供え物し念仏を唱えたりして祭事を行う)、  
「日」は〈日待、日の出を待ち日に拝礼する〉等の祭事で、まとめて〈庚申待〉となるようです。「二童子」は「青面金剛」の世話係の役割を担うとあります。青・赤・黒・肌色の「四夜叉」の青は〈諸行無常〉赤は〈是生滅法〉などとあります。「鶏」は時を告げ、見ざる、聞かざる、言わざるの「三猿」は「三尸虫」になぞらえて告げ口をさせない願いでしょうか。また、「申」から「猿」へとうつり〈猿田彦大神（導きの神、道祖神、塞神）〉が登場したりもします。この場合は〈道案内、厄災の侵入防止、子孫繁栄など〉を願っています。「庚申」から「荒神(こうじん)」（荒ぶる神、心を込めて祭れば靈験あらたかな神）を連想し〈竈(かまど)の神、人・家・地域・牛馬の守護神〉ともなるようです。

だから、庚申塔は道祖神として村の出入り口などに建立され、厄災の侵入を止める神として信仰されます。また、路傍に立てられ牛馬や田畑や屋敷、さらに子孫繁栄や家内安全を願う神として祀られます。

この諸々の信仰が複雑に習合した庚申信仰ですが、坂下の地区では講員等の願いは、実際どんな内容のものであったのでしょうか。今となっては、一人一人の思いを計り知ることも叶いません。

最後に、各地区の庚申石造物を示します。



↑高部観音堂脇の庚申石造物

右は「青面金剛像 寶永元申」(1704年)

下部に「三猿」が確認できる

左は「庚申塔 文化六己巳年十一月吉日」

と刻まれる(1809年11月)

裏に「彦左エ門、利右エ門、重右エ門、三右エ門、金之助、源兵衛」の銘有り



↑握観音堂脇の庚申石造物

左は「庚申供養塔 寛延三甲午天七月廿日

願主謹造立」(1750年7月20日)

右は「廿三夜塔 嘉永四亥三月廿三日」

裏に「くま、利十良、たる、うよ、才一、ちま、くの、伴右エ門、きの、くら、たる、つる、うで、みつ、藤蔵、和蔵、可ん、九平」の施主名

←相沢半僧坊の庚申塔と二十三夜塔

「文政元(1818年)戊寅九月吉日」とあり、江戸時代末期の庚申塔である。

この横に二十三夜塔がある。「嘉永七(1854)甲寅歳二月廿三日」とあり、やはり江戸末期の建立である。

↓中之垣外古庵の青面金剛像  
「正徳五乙未九月拾四日」  
(1715年9月14日)  
劣化はしているが、像上から「日月  
6臂の「青面金剛」その下に線刻で  
「三猿」をはっきり確認できる。



↓中之垣外古庵の  
「念三夜塔」(二十三夜塔)  
左の「青面金剛」と並び大きな  
岩の上に設置されている  
右面に「嘉永七甲寅天三月吉辰  
新田平 中之垣外平」とある  
(1854年3月)

